

RIDER TIME戦姫絶唱し
ないシンフォギア

バリート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主に「RIDER TIME 戦姫絶唱シンフォギア」にて、説明出来なかった補足説明をする場です。基本全話短編です。本編を未読の方は、是非本編を読んでみてください。

本編

<https://syosetu.org/novel/201185/>

目次

EP 6. 5	エクスカヤリオンって何なん？	1
EP 7. 5	実験に失敗は付き物	4
EP 8. 5	臨機応変って結構ムズイ	7
EP 9. 5	ネタがないのでキャラ紹介	10
EP 10. 5	投稿が遅いのは重加速が原因かもしれない	13
EP 11. 5	予定を立てるのって大事だよ	17
EP 12. 5	時は支配出来ないがこの世界ならなんとかいける	20
EP 13. 5	患者と医師の出会いも偶然？	23
EP 14. 5	背後から急に声を掛けられると凄くビビる	26
EP 15. 5	思春期の恋愛系の噂は広まりが早い	30
EP 16. 5	変な奴ほど友達になるのが良い	33
EP 17. 5	基本は繰り返ししても悲しみを繰り返さないようにしたい	36
EP 18. 5	後から出てくるキャラは	

	なんか能力持ちがち	39
EP 19. 5	奏は色んな場所に現れる	
?		42
EP 20. 5	人から認められるのは嬉	
しい		46
EP 21. 5	たまにはちゃんとしたの	
を		49
EP 22. 5	戦士も戦いの後はゆつく	
りしたい		52
EP 23. 5	わずかな時間の中でも	
55		
EP 24. 5	極限状態になると危ない	
		58
EP 25. 5	エクスカリバーIIについ	
て①		62
EP 26. 5	自分の作品ならある程度	
好きに出来る		65
EP 27. 5	ゴーホーム	
EP 28. 5	重い物運ぶのは面倒+α	
		72
EP 29. 5	卵の茹で時間は感覚だと	
難しい		75
EP 30. 5	完璧などない	
EP 31. 5	逢坂家ってなんなん	
?		82
EP 32. 5	続くことには理由と意志	

がある

85

EP33.5 火加減は体で覚えろ

88

EP 6. 5 エクスキャリオンって何なん？

王我「オツス、オラ王我！ やつと修行が終わってげんでえに帰ったってえのに、いきなり戦うことになるなんてなあ。オラワクワクすつぞ！」

響「えつと…どうしたんですか…？」

翼「あまり触れてやるな、立花。きつと疲れているんだ…」

響「でもまだ戦いの真っ最中のはずじゃ…」

王我「そこに触れるな。その辺に触れすぎると色々と面倒なんだ…」

翼「ふむ、分からないでもない…」

響「ええ、納得しちゃうんですか…。それはそうと、私逢坂さんに聞きたいことがあるんです。」

王我「ん？ 何じゃい？」

響「あの逢坂さんが纏っていたシンフォギアみたいなのって何ですか？」

王我「ああ、エクスキャリオンのことね。あれは、新型のシンフォギアのプロトタイプなんだ」

響「新型…ですか…？」

翼「そもそも、シンフォギアは歌の力で、型を形成する。しかし、このエクスキャリオンは歌の力には必要ないんだ」

響「ええ〜!??それってシンフォギアって言えるんですか!??」

王我「知らん!でも了子さんも『大丈夫♪』って言ってたか、大丈夫だよ、きつと」
響「なんか無茶苦茶ですわね…」

王我「それぐらしいしないと、二次創作なんてやってられないさ」

響「二次創作って何のことですか!??」

翼「知らない方がいい」

響「翼さんまで!??:はあ、分かりました。じゃあ教えてください。エクスキャリオンについて」

王我「おうとも、元々エクスキャリオンは『アーサー王伝説』に出てきた剣がモチーフと言われているんだ。それがほぼ完全聖遺物として発見され、シンフォギアの形にしたのがこれなんだ」

翼「まさに王の剣…」

王我「更にコイツは大型ノイズとの戦闘向きなんだ。従来のシンフォギアだと大型はきついだろ？」

響「いや…私まだともに戦えないんですけど…」

翼「いや、意外と辛いものだぞ。倒すのに時間のかかるものだっている」

王我「まあ翼の言ってる通りなんだけど、エクスカリオンなら大型を楽々倒すことが出来るんだ。」

響「へえ、凄いんですね！」

王我「でも、欠点もある。一撃が強力な分、一回一回の攻撃ペースが少し遅いから。小型相手だと少し苦戦する。しかも、使い続けると肉体に負担が来るため、制限時間付きだ。2年前だったら、5分くらいだったんだけど、今は10分くらいかなあ」

響「それでも、結構短いんですね……」

翼「完全聖遺物を制御下に置ける分その時間も短い。仕方ないことさ」

王我「まあ、特訓のおかげでコイツも成長したし……」

響「へえ、それについてもっと教えてください！」

王我「ん、また今度ね」

響「ええ!?? 何ですか!??」

王我「いや、もう最低字数超えたし……」

翼「これ以上書くと短編ではなくなるしな……」

響「お二人はさつきから何を気にしてるんですか!??」

EP7. 5 実験に失敗は付き物

響「あのーなんかすいません」

王我「ん、何？」

響「なんか私、すっごくいい話や決断をした筈なのになんかカットされちゃってるんですけど!!？」

王我「あー、等々響もこの小説の存在に気づいたが」

響「それはいいんですが、何ですか!!？アニメでは凄く重要なシーンだったのに、どうしてカットなんか!!？」

王我「あー、それは作者が悪い。あの人、前の予告で、ビルドのセリフ使っちゃって、上手いこと俺をビルドに変身させるとこまで無理矢理話を詰め込んだからさ…」

響「それで私のいい話はカットですか!!？納得出来ません!!？だったら、前回の予告を編集して下さいよ！私知ってるんですよ、こっそり予告のセリフ変えてるのを！」

王我「普通ならやってたかもね。でも、この小説見る人、ほとんどライダー好きだと思うし、ライダーのセリフなんて消したら『あれれ？おつかしいぞ？』って、行く先で殺人事件起きちゃう小学生探偵的なこと言い出しちゃう人が出るかもしれない

から…」

響「それなら私のセリフを消してもいいんですか?!?それこそおかしいですよ?!?」

王我「まあまあ、一回落ち着いて。はい深呼吸。吸って吐いて」

響「シユコー…シユコー…」

王我「どこぞのダー〇・ベイ〇ーだよ…とりあえず聞いて、一応作者の中では回想として使う予定だから、大丈夫。絶対響のすんばらしい言葉は読書に届くから…」

響「そうですか…」

王我「うん、作者も『ヤベツ、ビルド出すのに精一杯になって、物語の進みもアレな駄文が出来ちまったw次回どうにかしなきゃなw』って言ってるから」

響「それ笑ってますよね?!?その心笑ってますよね?!?」

王我「そこは触れない方がいいよ。凄くストレスがかかるよ。あーコラコラ、聖詠を唱えようとしないな」

響「いくら次でのシーンが出るって言っても、一回くらいぶん殴っても怒られませんよね!」

王

我

「や

め

な

さ

い!」

響「何でそんな伸ばしたんですか…」

王我「字数稼ぎ」

響「ええ…」

王我「いいか響、作者ぶん殴ったら次の響のいいシーンも書かれてないんだぞ、一緒にいた緒川さんや小日向未来さんだってセリフ無しのままなんだぞ！」

響「そうか…私一人のセリフじゃないんですね…」

王我「うん、慎重にね」

響「ん？ところでこの次回予告…」

王我「…またやらかしたかもな…」

響「作者く!!？」

EP8. 5 臨機応変って結構ムズイ

王我（ビルド）「とうとう、ジオウの力が一つ復活したぞ！ワッフオーイ!!？」

響「あのく王我さん？」

王我（ビルド）「夜はく焼き肉っしょ!!？」

響「あの、王我さん！」

王我（ビルド）「ん、どうかした？」

響「なんか今回、王我さんの名前のところに変な○あるんですけど、これって…」

王我（ビルド）「あー、コレは俺の性格が変化してる時に出る○だ。こっちだと会話文しかないから、○無しだとどんな状態かわかんないしな」

響「そうなんですなー」

王我（ビルド）「そうだよ。今日は俺の発明品修理が上手くいって凄く気分がいいからもつと質問してもらっても構わないぞ！」

響「じゃあ、王我さんのライダーの力について教えてください」

王我（ビルド）「了解。まず、ライダーの力は大きく分けて2つ。ジオウとそれ以外だ」
響「ジオウだけ特殊なんですなー」

王我（ビルド）「ああ、ジオウは変身した後も、特に変化はないんだけど、ぶっちゃけ今のジオウは殆どのアーマーを纏えないから汎用性が低いんだよな」

響「へえ、ジオウも超有能って訳ではないんですね」

王我（ビルド）「逆に別ライダーは汎用性は高いものの、他の力が使えなくなるからな。どれを使うかは状況次第だな。ちなみに状況の相性例がこんな感じ」

・ノイズ戦

ジオウ<別ライダー<エクスキヤリオン

・アナザーライダー戦

エクスキヤリオン<<<別ライダー<<<ジオウ（アーマー有り）

響「そういえば、服も変わってましたけど…」

王我（ビルド）「うん、着てる服も変わるし、更には着てない服も変わる」

響「なんか色々変わるんですね」

王我（ビルド）「まあ、時間経てば元通りなんだけとね。そんなことより、良かったなあ響、ちゃんと前回の雪辱はらせて」

響「ホントですよ。良かったらちゃんと使われてて」

王我（ビルド）「しかも、任務でちゃんと成功を収めてるし、俺の次くらいに優秀じゃん！」

響「ははは…その一言さえなければ、もっと喜べたんですけどね…」

弦十郎「おつ、二人ともこんなところに、ちょうど良い」

響「師匠、どうかしたんですか？」

弦十郎「今日は、焼き肉でも食べようかと思つてな。良かつたら二人も来ないか」

響「えつ、いいんですか?!?でも翼さんいないのに…」

弦十郎「今回は響くんの、成功祝いだ。翼とはまた退院後行けばいい」

王我（ビルド）「ほら、おじさんもこう言ってるし」

響「では、お言葉に甘えさせてもらいます!」

王我（ビルド）「よーし、夜はく〜」

王・響「焼き肉つしょく!!?」

EP 9. 5 ネタがないのでキャラ紹介

王我「さて、今回は何について話そうか？」

響「今回の話ってあんまり、追加情報って必要あるか微妙なところでしたもんね」

王我「うーん…じゃあ、俺のプロフィールでも紹介すつか」

響「えっ、ここでですか？何か微妙な位置じゃないですか？普通プロフィール紹介って分かりやすいところに投稿するはずじゃ…」

王我「タイトルをそれっぽくすれば大丈夫だよ。そんじゃ、紹介するで」

逢坂 王我

誕生日 4月28日 16歳(2041) ↓ 18歳(2043)

身長 / 175cm(2041) ↓ 179cm(2043)

血液型 AB型

好きな食べ物 / 唐揚げ

嫌いな食べ物 / 特に無し

夢 / 王様(人の平和を守りたい)

趣味／ 歴史上の王様の政策を調べること／ 母の研究をみること／ 歌

得意なこと / 基本何でも（やる気を出せば）

苦手なこと / 色々（やる気が出ないこと）

王の力を授かりし者。将来最低最悪の魔王 オーマジオウとなる未来が待っている。現在風鳴家とほぼ同等の権力を持つ 逢坂家に生まれる。基本的に一般常識はあるが、時々常人では考えつかない行動をする。

元々人の為に何かしたいと思う気持ちがあり、子供の時見た夢をキツカケに王様になることを決意する。風鳴 翼とは家の関係もあり、生まれた時から幼馴染であり、小さい頃はよく一緒に遊んでいた。また数年後には天羽 奏と出会い彼女とも友好関係を築く。普通っていた高校はリディアンではなく、近くの光ノ森高等学校。おばあちゃんのことをかなり慕っている。

そして、第0号聖遺物とされている「エクスカリオン」の装者でもあり、また未来にて仮面ライダーの力を手に入れる。

王我「まあ、こんな感じかな」

響「でもまだ少し字数が足りませんね」

王我「じゃあ、俺の両親でも紹介すつか」

逢坂 一也

逢坂家現当主であり国家安全保障局長でもある。更にはヴァイオリンのプロでもあり、更には他の分野でも高い功績を残し『千年に一人の逸材』とも呼ばれていた。大人になり彼の父、つまり王我の祖父が当主を辞任し当主の座についた。彼の政治能力は高く、日本で彼の名を知らない者はおらず、海外の有力者にも注目されている。

逢坂 夜忍

特異災害対策機動部二課の元開発責任者。現在はその役目を降り、エクスカリオン専属の整備士になっている。二課の設立にも携わっていて、彼女の助手でもあった櫻井了子が提唱した「櫻井理論」の研究にも協力した。また、櫻井理論とは異なる設計を施されたエクスカリオンの基本設計も彼女主体である。

王我「よし、字数が満たされたぞ」

響「ではまた次回！さようなら」

EP 10.5 投稿が遅いのは重加速が原因かもしれ

ない

響「あれ？王我さんがいない：王我さーん」

王我（ドライブ）「ん？何？」

響「何横になってるんですか？！もう始まってますよ！」

王我（ドライブ）「いや〜何か疲れてなくたまにはこうゆっくりするのもいいかな〜って」

響「でもここはちゃんとしましょうよ、って何食べてるんですか？」

王我（ドライブ）『ひとやすミルク』美味いぞ〜食べるか？」

響「あつ、ありがとうございます。ってそうじゃなくて」

王我（ドライブ）「でも今回も特に喋ることなくない？」

響「でも何か話題考えましょう。例えば：あの喋るベルトとか」

王我（ドライブ）「あぁ〜ベルトさんね〜、ちよつとベルトさん！」

ベルトさん「やあ、この場で話すのは初めてだね」

響「わつ、本当に喋った？！えつと：」

ベルトさん「私の事は呼び捨てしなればなんでもいい」

響「じゃあ、王我さんと同じ『ベルトさん』って呼ばせていただきます」

王我（ドライブ）「そうだな。じゃあ今回は俺の大事なパートナー達について紹介するか」

響「それでこの：ベルトさん：？って一体何処から来てるんです？」

王我（ドライブ）「具体的な説明は難しいな。でも基本的には俺がライドウオッチを使わないと出てこない。だからベルトさんはドライブウオッチを起動させないと来てくれないんだ」

ベルトさん「そうなんだ。王我がドライブの力を所持していないと私は駆けつけたくてもそちらに向かうことが出来ないのだ」

王我（ドライブ）「他のライダーの力でも似たようなことはあつてさ、何て言えばいいんだろ：まあ、俺とのつながりが大事ってわけ」

響「じゃああの時トライドロンが消えたのも：」

王我（ドライブ）「うん、アレもドライブの力だから時間切れと共に消える」

響「もし、消える時に乗ってたら：」

王我（ドライブ）「ああ、そう思うかもしれないけど、時間切れになつてもある程度力は保つことは出来なくはないんだけど：」

響「だけど何です？」

王我（ドライブ）「ぶっちゃけ超しんどい。無理矢理力出してゐる感じ」

響「ああそれは大変ですね」

ベルトさん「まあ私としてはもつと活躍の場が出来るよ……って何だ？」

王我（ドライブ）「あ、時間切れだ」

ベルトさん「そうなのか、王我もう少し頑張れないか？私も一応最後まで残ろうと思つてたのだが……」

王我（ドライブ）「ん〜面倒くさい」

ベルトさん「なっ：そんなこと言わず頑張っ」

響「あつ、いなくなっちゃった……」

王我「もう時間だったのか？早いもんだな……」

響「それでもう一つ話があるんですけど……」

王我「ん？何かあったっけ？」

響「最近、本編の投稿ペース遅くないですか!?!」

王我「ん〜、小説紹介でも『不定期更新』ってあらかじめあるし問題ないと思うけど……」

響「いやいや、このままじゃこの小説の存在忘れられますよ……」

王我「なるほど：アナザー小説ってことか？」

響「アナザーライダーみたいに言わないでください！で、一体どうなってるんです？」
王我「それはな、実はこの後の話の内容はほぼ決まってるんだけど、1話ごとのボリュームを調整してるんだよ」

響「小説のボリューム？」

王我「大体1話につき6000文字くらいになるよう調節してから次回予告を書くために必要なセリフ考えてんだよ。作者もリアルが凄く忙しいみたいだし：あの人もあの人なりに頑張ってるの」

響「それって次回の話が大体出来上がってるってことですよね」

王我「多分、次回の投稿はそれなりに早いかもしれないな」

響「おぉ〜！」

王我「でも今年中に一期は終わらないってもう確定もしてる」

響「何ですか！！？」

王我「忙しいんだよ：リアルが：」

EP11. 5 予定を立てるのって大事だよ

王我「さてと：今回も何話すか全く決めてないんだよね」

響「そういうのは早めに決めておくべきですよ。作者に言っておいてくださいよ、せっかく翼さんも戻ってきたんですから」

王我「いやそれ考えるくらいなら本編書くって作者言ってたよ」

響「あの人結局、大丈夫なんですかね。最近誤字が増えてきてますし。私の名前間違えられてシヨックですよ！」

王我「あの人は凄い集中するときはするけど基本どっか抜けてるからなあ」

翼「スピードと正確さ。両立するのは難しいからな。頑張ってほしいものだ」

響「翼さん！こちらではお久しぶりです！」

翼「で、王我今回の話題は、これからの進行予定でも話せばよいのではないか？」

王我「ああ、それもアリだな。じゃあザツと出しますか」

戦姫絶唱シンフォギア編↓本編軸が終わっても10話分ぐらい後日談などを投稿します。

戦姫絶唱シンフォギアG編↓大体50話分ぐらいになる予定

戦姫絶唱シンフォギアGX編↓多めにとり70〜80話分くらいになる予定

戦姫絶唱シンフォギアAXZ編↓GX編と同じぐらいのボリューム

戦姫絶唱シンフォギアXV編↓50〜60話分くらい

また今年の投稿数は多くても4本となります。

響「普通はここで投稿予定なんて書かないですよね」

王我「まあ、いいじゃん。創作は自由であつてこそだよ」

響「とか言うより、今からこんな予定立てて大丈夫なんですか、まだオリジナル談の

話すら考えてないじゃないですか」

王我「大丈夫、ノリでやってこい」

響「ん？つて何勝手に今年の投稿本数決めちゃってるんですか!?!？」

王我「作者曰く、達成出来るくらいの目標の方がいいって言った」

翼「無理な課題ではやる気が削がれるだけなものな」

響「それにしてもここで話すこと、本当になくなりましたね」

王我「作者の発想力がないのが悪い！」

翼「ならいつそ読者に話題提供を要請するのはどうだ？」

王我「それいいな。元々、補足情報を発信する場だし、更に言うとな読者の疑問とか作者は分らんもんな」

翼「と、いうわけでこの小説では質問、感想を大募集している」

王我「簡単なでもいいから送ってくれたら嬉しいぜ」

響「でも、来ますかね？今のところ感想全部誤字報告だけですよ」

王我「将来性に賭ける」

響「また確実性のないことを：まあ感想募集はいいですよね」

王我「そうそう、ポジティブに」

翼「ところで：私はいつまで天羽々斬の上で待機していないといけないのだ？」

王我「：次回まで待て！」

クリス「いつまで喋ってたんだ、コイツら!!？」

E P 1 2 . 5 時は支配出来ないがこの世界ならなんとかいける

響「何してるんですか!!? 2ヶ月も投稿しないなんて!!?」

王我「作者曰く、リアルでの多忙な日々、創作意欲の欠如、その他諸々で出せなかつたよ」

響「だとしても何とかして投稿しましょうよ。他の投稿者はもつとしっかりしてますよ」

王我「人は人、家は家。不定期更新ってちやんと書いてあるからわかってくれるよ」

響「でも12話が出るまで本当に時間かかりましたね」

王我「あの人、話の大まかな内容は出来てるけど中身スカスカだからな。忙しい時期だとその隙間が埋められないのなんの」

響「この時期も忙しい。休みの日も何か忙しい：もしかして作者って：」

王我「響、それ以上言っちゃダメだ!!? 作者にもプライバシーはある。確かに勘の良い読者はもう作者のリアルが何となくわかるかもだけど：」

翼「そのような勘のいいガキは嫌いだ」

響「翼さん、ダメですよ！そんなこと言っちゃ！」

翼「ん：最近の流行に乗ってみたのだが！」

王我「いや、それも鉄板過ぎて最近ではないと思うけど！」

翼「何だと?!？」

響「ネタはともかく、どうするんですか?!?もう今年も終わりますよ！なのにまだ一本しか投稿してないじゃないですか?!？」

王我「でも作者は嘘はついてないぞ。『多くても4本』って言ってたし」

響「でも一本は少な過ぎませんか？普通2・3本は出すと思いませんか？」

翼「作者もここまでやる気が出なくなるとは思わなかったのだろう」

響「まあ：過ぎたことをあーだこーだ言ってももうどうにもなりませんから置いといて、早く最新話を出すのが数少ない読者に対しての厚意だと思えますよ」

王我「いや、作者はしばらくは最新話は出さない予定だぞ」

響「本当にやる気あるんですかあの人?!？」

王我「落ち着け。全く何もしないわけじゃない。今までの話を少し微調整するらしい」

響「ふえ？どういう事ですか？」

翼「話の内容は変わらないが、これからに備え、付け足しをしようというのだ」

王我「1・2話とか短いからなく」

翼「これからの伏線とかも書かれるかもしれないな」

王我「要はこの作品の」

響「へえ、じゃあ小さい時の私も出てきたりしますかね？」

王我「まあ、多少追加されると思うよ。てかきつと書く」

響「えへへ、じゃあ許します／＼／」

王我「(チヨロいな)」

翼「(分かるぞ、立花。自分の出番が増えるのはとても喜ばしいことだ)」

王我「そんなわけで読者の方には申し訳ないけど、もうちょっと経ったらもう一回」

話から見直してみてくれ」

翼「それでミスも見つかるともしれないからな」

響「では皆さん：」

王我・響・翼「良いお年を!!？」

EP13. 5 患者と医師の出会いも偶然？

翼「ライダーの力も3つ戻ってきた。期間で言えばとても順調……。ちなみにあとあとどのくらいなの？」

王我（エグゼイド）「あと16だね。でも、その内の1つはウオッチが行方不明になっているからなあ……」

翼「そう……まだ大変なこともあるのね……。ところで王我、あの医者とスカジャンの人はどこで出会ったの？あなたに友人が多いのは知ってたけど……」

王我（エグゼイド）「ああ、確か言ってなかったよね。じゃあ今回は僕と飛彩さん達の関係でも話そうかな」

翼「：そうか。今王我はエグゼイドウオッチを起動させていたんだった。少し慣れないな……」

王我（エグゼイド）「ごめん、そればかりは慣れて。じゃあ早速話させてもらおうよ。まず飛彩さんから……。鏡飛彩さんと会ったのは中1くらいだったかな。その時凄く具合の悪そうな人を僕が助けて病院に連れて行ったんだけどその時に出会ったんだ」

翼「そんな話が……。やはり王我は人の事を思っただけのね……」

王我（エグゼイド）「でも最初は、中々診察をしてくれなくてそれで言い合いになっちゃったけど、今では程々に良い関係になってるよ」

翼「王我が言い合いに：！！？ 凄いのね鏡さんとの出会いは」

王我（エグゼイド）「龍我さんはもつと凄かったよ。最初万丈龍我さんは強盗犯と間違われていてね：」

翼「そうだったの！！？」

王我（エグゼイド）「流石にそんなことはないと思って僕が検査を提案したんだ。そして結果で別人って証明されてその事を感謝されて今に至るって感じだね」

翼「こう聞くとあなたは人を助けてばかりね。まあそれが王我のいいところなんだけど：」

王我（エグゼイド）「まあ、そんな訳で僕と飛彩さん、そして万丈さんとの出会いはこんな感じで：」

翼「：それよりあなた確か万丈さんのことは呼び捨てで呼んでなかった？ それもウオッチの影響なの？」

王我（エグゼイド）「まあね。一応今の僕は医者を目指す高校生だから言葉遣いにも気をつけないといけないからね」

翼「それもウオッチの影響：あなたも色々大変なのね：」

王我（エグゼイド）「まあそれでも僕の夢は王様だけどね」

翼「そこがブレないのも王我らしいわね。：立花もブレなければ良いのだが：」

王我（エグゼイド）「どうだろう：。いずれ仲直り出来ると思うけど、事が事だから何とも言えないな：今は響を支えてあげよう」

翼「：そうね」

翼「（そう言えば何か他に言わなければならぬことがあったような：）」

王我（エグゼイド）「（作者さん：！どうにか更新が遅れたことをごまかせましたよ：！）」

EP14. 5 背後から急に声を掛けられると凄くビビる

翼「もう始まっているのに誰もいない…。今回はどうやら私一人で進行を進めるようだな」

翼「しかし、誰もいないとなると何をすれば良いのか分からないな…」

王我（ゴースト）「別に変わったことはしなくていいんじゃないか？」

翼「王我!?? いつの間に!??」

王我（ゴースト）「ごめんごめん、ちゃんと能力が使えるかどうか確認してただけだったんだけど…」

翼「能力：って気配を消すのが？」

王我（ゴースト）「いや、こういうの」↑姿キエール

翼「ええっ!?? 王我がいなくなっただけ!??」

王我（ゴースト）「ずっとここにいますよ」↑アラワレール

翼「それって…」

王我（ゴースト）「霊体化だよ。ゴーストにはこんな能力もあるんだ」

翼「ビルドの時とかもアレだったけど今回は特に異常ね」

王我（ゴースト）「まあ、元々人の力を超えてるからみんなを救えるっていうのがあると思うよ。シンフォギアだつてそうだし」

翼「ねえ、王我：怖くないの：？」

王我「？何が？」

翼「ライダーの力つてまだ謎なこともあるんでしょ？それなのに：」

王我（ゴースト）「もちろん、怖いさ。でも怖がつてばかりじゃいられない。命を燃やして思いのまま動くことも大事だと思うから：」

王我「（もちろん俺が本当オーマジオウになるのかどうかも：）」

翼「王我：」

ユルセン「おいおいイチャついてんじやないよソコ」

翼「な：何？？この幽霊！！？」

王我（ゴースト）「ユルセン、あんまり翼をおどかさなよ」

翼「王我、此奴はまたあの立花が言つてたベルトのような奴か？」

王我（ゴースト）「ああ～まあそんなところかな。コイツはユルセンだ」

ユルセン「よろしく」

翼「は、はあ：」

ユルセン「：あれ？俺消えかかってない？」

王我（ゴースト）「あれ？もう時間切れか？」

ユルセン「いや出番短すg」

翼「い：いなくなつた：。まだどこかにいるとかは：」

王我「いや、ゴーストウオッチの時間が切れたからもういないよ」

翼「本当だ。服も元に戻つてる：」

王我「それで翼、お前は結局何悩んでたの？」

翼「そうだ。今回はどのように進めていくか考えていて：。私は今本編では戦えない状態だからな。何かここで爪痕を残したいと思つて：」

王我「それで思いついたのは？」

翼「何か剣技でも披露しようかと：」

王我「いやいや、活字だしこの文章の書き方だし伝わらないつて」

翼「何？！？うーん：ならば：」

王我「（目を瞑つて必死に考えてる：）」

王我「：：：：」 ↑後ろに周りコーム

王我「わっ！」

翼「なつ：：！？」

王我「はい！翼の驚いた表情が3回も見れたことです。でまた次回お会いしましょう。さようなら」

翼「ちよつと…王我！」

王我「（それにしても…ユルセンの声、どこか別の場所で聞いたような…）」

EP15. 5 思春期の恋愛系の噂は広まりが早い

創世「なんかビツキーとヒナに悪いことしちゃったね」

詩織「後で謝っておいた方が良くないかもかもしれませんね」

弓美「え？結局何だったの？」

創世「アンタは早く状況を把握しなよ」

弓美「まあそれはそれとしてさ、知ってる？最近響に男が出来たらしいよ」

創世「え!?嘘!?あのビツキーが!?」

詩織「男：というと彼氏さんのことでしょうか？」

弓美「そうそう！ちよつと前に響らしい人を見かけたんだけど、男の人とバイクを二

人乗りしてて：」

創世「ん〜でもそれだけで彼氏って判定出来るかな〜」

弓美「出来るわよ！アニメだと二人乗りするのは大概兄妹か主人公とヒロイン、だけ

ど響に兄はいない。これは彼氏で間違いない！」

創世「まだだよ：もうリアルとアニメをごっちゃにしないの」

詩織「あ、そういえば私も以前男の人と歩いているのを見かけましたわ」

創世「え、本当!?？」

詩織「はい。彼氏さんかどうかはわかりませんが：

弓美「ほら！段々明らかになっていったわ！」

創世「またそうやつ：ああつ!!？」

詩織「どうなさいました!?？」

創世「私も思い出した！リディアンの近くの病院から男の人と一緒に出て行ったの私見てたわ！」

詩織「病院ですか：なら誰かしら共通の知人がいるということですね」

創世「確かに少し本当のように感じてきた：

弓美「うーんあとちよつと何かがあれば確定なのに：いつそ今度尋問してみる？」

創世「いやまだやめておいた方が良いよ。ビツキー、ヒナとの関係がなんかアレだからそういうこと聞くのは流石に可愛そうだよ：

詩織「そうですね。せめて聞くとしてもお二人の関係が落ち着いてからですね」

弓美「あれ？ちよつと気になってきた？」

詩織「これだけお話を聞いていたら少し興味が湧いてきました」

創世「そうだよね。ただでさえリディアンは女子校だから異性との出会いがないもんね」

弓美「待ちなさい。異性なら先生がいるじゃない」

創世「いや先生は：ってまたアニメと絡めたな！」

詩織「相変わらずですね」

弓美「いや意外と馬鹿に出来ないわよ。恋に年齢は関係ないって言うし」

詩織「少女漫画でありそうなセリフですね」

創世「先生を対象にするのはやめときなよ」

弓美「うーん、まあそうですね」

詩織「私達にはまだ未来がありますものね」

創世「それにしても：」

創・弓・詩「結局その男の人は誰なんだろう（でしようか）：？」「」

王我「ぶえつくしよん!!？」

賢吾「？風邪か？」

王我「いや、何か急にくしやみが：」

EP16. 5 変な奴ほど友達になるのが良い

響「あのく歌星さん」

賢吾「なんだ？」

響「王我さんってどのくらい友達がいらっしやるんですか？」

賢吾「かなりいるぞ。生徒会長とか元天ノ森のキングとクイーンとも友達だ」

響「ほ、本当に人脈あるんですね」

賢吾「まあ最初は『王様になる』なんて言ってたから馬鹿にする奴が多かったし、あの逢坂家の人間だったから関わりにくかったんだろう」

響「色々とおつたんですね」

賢吾「だけどアイツは本当に皆を守ろうとして、そして一人一人をしつかり見ている。困った時は手を差し伸べてもくれた。そんなアイツにだんだんと心を許す生徒が増えていったんだ」

響「へえ、じゃあ歌星さんもそんな感じな出会いだったんですか？」

賢吾「まあそうだな、俺が最初に会ったのは中学2年の頃だったかな、最初は俺にしつこく絡んできて腹が立っていたが、ある日ノイズに襲われてな……」

響「ノイズにですか!?!? 大丈夫だったんですか!?!?」

賢吾「大丈夫だからここにいるんだ。まあその時王我が守ってくれてな、黄金の鎧を纏って」

響「王我さんが装者なの知ってたんですか!?!?」

賢吾「ああ、そして俺を守った時アイツは『別に俺を嫌いでもいい、俺は王として家族、友達、国民全てを護ってやる』とな」

響「少し王我さんらしいですね」

賢吾「時には喧嘩もしたがやはりアイツは凄いい奴だ。変な奴ほど将来名を残したりするがアイツは本当に王様になれるかもな」

響「はい、わかる気がします。誰よりも皆のことを考え、知らない人でも自分を憎んでた人でも助ける。普通の人なら出来ません。私はそんな王我さんに憧れたんです」

賢吾「君もアイツの凄さに感化されたんだな」

響「私、元々人助けが趣味みたいなもので：周りからは時々馬鹿にされたりしてきましたけど、王我さんを見て私は間違ってたなと思えたんです」

賢吾「そうか：君はどこかアイツと似てる。アイツ、実は裏では結構苦労しているんだ。もし折れた時君が支えになってくれ」

響「はい！でも私だけじゃありません。私の仲間や王我さんの友達、歌星さんだって

支えてくださるんですよ！じゃあ絶対に立ち直りますよ！」

賢吾「ああ、本当に君は王我に似てるな」

響「いやあくあはは」

賢吾「王我によろしく言つといてくれ」

響「はい！」

王我（フォーゼ）「よう、響！」

響「王我さん：って何ですかその拳？」

王我（フォーゼ）「友情の証だ、ほら！」

響「は、はい！」 ↑拳打ち合わせーる

王我（フォーゼ）「よっしゃ！」

響「（王我さんは人との繋がりを大事にする人なんだなあ）」

EP17. 5 基本は繰り返しても悲しみを繰り返さないようにしたい

王我（ファイズ）「つたく、めんどくさいことになったなあ」

未来「ええつと響、あの人あんな感じだったっけ？なんかさつきと全然違うけど…」

響「ええつとね、あれは…その…何と言うか…」

王我（ファイズ）「何だよ」

響「えつと：王我さん！まだウオツチについてよく知らない未来や最近読み始めた読者の方に向けてまたライドウオツチの説明をするのはどうですか？」

王我（ファイズ）「…まあいいや、今回はライドウオツチを使った時どんな変化が起るか教えてやる」

響「確かにだんだんとこの小説を読む人増えましたからね」

未来「小説：？何の話をしているの？」

王我（ファイズ）「ざっくり言うとな変化するの3つ。一つ目は俺」

響「今回のファイズは性格少し無愛想になるんですね」

王我（ファイズ）「うるさいなあ、いいだろ別に」

響「い、ごめんなさい…」

王我（ファイズ）「いや、別にいいけどさ」

未来「（すっごい変わってる!）」

王我（ファイズ）「あと物によつては身体能力が高まったり、特技が増えたりするものもある」

未来「色々使い道があるんですね」

王我（ファイズ）「2つ目は俺ん家だな」

響「え！王我さんの家も変わるんですか!?!？」

王我（ファイズ）「ああ、俺ん家は昔親父が時計屋を趣味で初めてさ、今は多忙だから店を閉めて俺1人で住んでるんだけど」

未来「まさかお店が変わってたりですか?」

王我（ファイズ）「そうだ」

響「この前ビルドの力を使った時はカフェになってたんですね。翼さんから聞きました」

未来「ビルド:??」

響「未来、その話も今度」

王我（ファイズ）「3つ目は人の記憶だな」

未来「人の：記憶ですか？」

王我（ファイズ）「ああ、俺がウオッチを使うとこんな風になるだろ。でも周りの人間は誰も驚かない。それは世界が俺をそういう人間と解釈するからだ」

響「元々そういう人と思わせる：ウオッチって不思議ですよ」

未来「でも響もそうですし私も変化に気付いているんですけど：」

響「ああ、たしかに私もそうだし二課の皆さんもそうだ！王我さん、どんな感じに改変される人とされない人で分かれてるんですか？」

王我（ファイズ）「う〜ん・それは：あれじゃないか？俺と関わりのある奴とか：」
??「嘘つきなんだよ、逢坂王我って奴は」

王我（ファイズ）「草加？？お前」

草加「いいか、悔しいがコイツと関わりのある俺は性格が変わったことを知らない」

王我（ファイズ）「悔しいって何だよ」

草加「要するにこれは作者の適当な：」

王我（ファイズ）「ふざけんな！」

未来「もうめちやくちやだよ：」

EP18. 5 後から出てくるキヤラはなんか能力持ちがち

王我「響、小日向さんと仲直り出来て良かったね」

翼「そうね、それに奏にもう一度会えたし：」

王我「確かに嬉しいことが続いているけど、フィーネの件もだし、このライドウオッチも：」

翼「そのライドウオッチは：？」

王我「仮面ライダークローズと仮面ライダーブレイブ。確かビルドとエグゼイドと一緒に戦った仲間だった気がする」

翼「よく覚えてないの？」

王我「いや、むしろ覚えてきた方さ。最初は力を使った後はそのライダーの特性や戦い方も忘れてたからさ」

翼「やはりウオッチは不思議ね：」

王我「これも俺が変身出来るのかな：？」

奏『いや、多分王我じゃない』

王我「奏！起きてたのか！」

翼「奏！私の声が聞こえる？」

奏『ああ、バツチリ！そんなでもってそのライドウオッチはどうやらアタシが使った方が良さそうだな』

王我「どうしてそんなことが言えるんだ？」

奏『なんかオーラみたいなものが見えるんだよ』

翼「オーラ：？」

奏『ああ、例えばそのビルドのウオッチ、王我に対してオーラは放っているけどアタシや翼には何もない。逆にクローズのウオッチはアタシだけにオーラを放っている』

王我「それって奏がクローズに変身出来るってことなのか？」

奏『いや分らない。ゲイツライドウオッチも似たような現象が起きてるからそうかもしれないって思っただけだ』

翼「今度試してみる必要があるみたいね。シュミレーターを使ってやってみましょう」

奏『いや、アタシは戦うって決めた時しか戦えないし一日一回しか無理。おまけに今はお前たちが怪我をして全力出せない状態だろ？無闇に力を使えないさ』

王我「そうだな：実践試すしかないか：」

翼「そういえば奏は知ってるの？あの時奏が守った子が：」

奏『ああ、断片的だが王我がこつちに帰ってきてから時々見てたんだ。本当によかったよ、生きててくれて：』

王我「戦つてることについては何も言わないの？」

奏『アタシ的にはせつかく助かった命、無駄にして欲しくない。けどアイツの固い意志を見たら邪魔するのは野暮だなって思つてさ』

王我「そうか：さていい時間帯だしご飯でも作るか」

翼「なんか久しぶり、王我のご飯」

奏『アタシは食えないからいいよ』

王我「うくん：じゃあ雰囲気だけなんかやつとくよ」

奏『サンキュー』

王我「あいよ」

翼「ふふ、声は聞こえないけど王我の反応でなんとなくわかる。奏の言つてることが奏『流石だな、翼』」

翼「いつか私も実際に奏の声が聞こえたならいいな…」

王我「いつか聞けるよ、きつと」

EP19. 5 奏は色んな場所に現れる？

王我「ふう：今日の訓練も疲れた〜」

奏『てかあの量はヤバイな。男だからといいこれはキツすぎるぜ』

王我「ああ、とにかくバーチャル空間で早い乗りものに乗せられ、今までなかったラ
イフルの訓練をしたり、色々大変だよ」

奏『すつげえ汗かいてるもんな』

王我「うんそうだね：つて奏？」

奏『ん？なんだ？』

王我「お前つて今見てる俺の光景見えるんだよな？」

奏『ああそうだけど？』

王我「じゃあ俺結構、お前に裸体晒しちやつてるんじや：」

奏『まあそうだな』

王我「ヤバイ、意識したらめっちゃ恥ずかしくなってきた：」

奏『まあ：気にすんな。アタシは半分死んでるようなもんだし、死人に裸見られても
大丈夫だろ：？』

王我「こんな風に会話出来る死人がいてたまるか!…と云うことはトイレとかも…」
奏『ま、まあそうだな：』

王我「もう嫌だー!」

奏『わかつたわかつた、いつも通り寝るから』

王我「そつか、その状態でも奏は寝る：ん?いつも通り?」

奏『あ、ヤベ』

王我「お前、今いつも通りって言ったよな：ってことは別に俺の裸を見た訳じゃないんだな?」

奏『えーと：たはは：いやあく王我をからかうなんて中々出来ないからちと楽しくてさ：ゴメン!』

王我「かくなぐでく!」

奏『悪かつた悪かつた。てかさつさとシャワー行けよ。ちゃんと寝るからさ』

王我「絶対だからな!」

王我「ふうサツパリしたく」↑シャワーアガリ

奏『：ん?終わったか?』

王我「うん、てか自分でやれって言っておいてアレだけど、奏よくこんな時間でも寝れるよな」

奏『いや、別になんか寝ようって思うとすぐ寝れるようになって更に寝起きがめっちゃや良くなった感じだな』

王我「なんか機械みたい」

奏『それより王我！アタシ気付いたんだけどさ、ゲイツライドウオツチさえあれば誰でもアタシを召喚出来るかもしれない』

王我「どういう理論だよ!!？」

奏『なんかさっきの夢でそんな感じだったんだ！ちよつとやってみようぜ』

王我「ってそんな無闇に実体化して良いのかよ」

奏「もう夕方だし大丈夫さ。それより早く試そうぜ！」

響「で、私と呼ばれたんですか？」

王我「ごめんね、奏力試したいって聞かなくて……」

奏『いや、これが出来ればアタシと王我が短時間とはいえ別の場所で戦えるんだぞ。』

二箇所でライダーが戦えるのは二課としても戦力になるさ』

王我「まあ、そうか？」

奏『さあ、さっさとやってくれ！』

響「いきまーす！」

『ゲイツ』

奏「つしやあ！出来た！」

王我「嘘：：！！？」

響「うわあ！！？奏さん！！？」

奏「これで対戦の幅が広がったぞ、サンキュー王我、響！つてな訳で、王我勝負だ！」

王我「：そうだ、戦う意志がないと実体化出来ないんだった：これ戦うしかないの？」

奏「アタシもベルト巻いちまったから頼む！」

王我「はあ：さつきシャワー浴びたばっかなのに：」

EP20. 5 人から認められるのは嬉しい

響「そういえば王我さん」

王我（鎧武）「ん？どうした？」

響「鎧武の力を使った時の王我さんってあんまり変わった感じがないんですけど…」

王我（鎧武）「ちよつとわかりにくいかったか？じゃあちよつと見せるか、よつと！」

↑バクチュー

響「す、凄い！凄く綺麗なバク宙ですね！」

王我（鎧武）「更にはこんなことも・ほっ！」↑レンゾクバクテーン

響「うわあ！凄い！凄い！」

王我（鎧武）「こんな感じで運動神経がめっちゃ良くなる」

響「今までとは別の用途があつて凄い便利じゃないですか！」

王我（鎧武）「まあノイズの攻撃も避けられるからいいけど、あくまでもそれは緊急時

だから普段は別のことに使うさ」

響「例えばどんな時に使うんですか？」

王我（鎧武）「そうだな・今までやってきたのは、ダンスとかだな」

響「王我さんダンスもしてたんですか？」

王我（鎧武）「ああ、チーム鎧武っていうグループで時々助っ人で呼ばれるんだよ」

響「あ、知ってます！王我さん、チーム鎧武の人と知り合いだったんですか？」

王我（鎧武）「ああ、中学生の頃に時々呼ばれてな。正式に入らないかって誘われたけどこつちが忙しいから今までの形で落ち着いたんだ」

響「やっぱり王我さん顔が広いですね。因みにチームバロンの駒紋戒斗さんとも面識があるんですか？」

王我（鎧武）「そうだ、何回かダンスパフォーマンズする場所を争ったりする時もあるけど」

響「じゃあ、仲が悪いんですか：？」

王我（鎧武）「いや、別にそうじゃなくて、ただお互いに目的はなんとなく似てるけどやり方が全く違う感じだったんだ」

響「方向性の違いみたいなのやつですか？」

王我（鎧武）「そうそう、でも少なくとも俺はアイツはいい奴だと思ってるよ。あつちはどうか知らないけどさ」

響「きつと戒斗さんもそう思ってますよ。王我さんは皆に手を差し伸べますから」

王我（鎧武）「そうだと嬉しいな。人に良く思われるのは得だし、何より戒斗とはこれ

からもよろしくしていきたいし」

響「人と仲良く出来るっていいですね。私も未来と仲直りした時は嬉しくて泣きそうになりましたよ！」

王我（王我）「ホントだよな。まさかその後俺も未来と仲良くなるなんてな」

響「確かにそうですね。事情聴取の時に結構会ってましたからきつとそれですね」

王我（鎧武）「まだまだ俺の友人は増えそうだ」

響「王我さんはきつとそういう才能があるのかもしれないですね」

王我（鎧武）「ああ、そうだといいな」

EP21. 5 たまにはちやんとしたのを

響「アナザーゴースト：今回は戦いにくい相手ですね」

翼「ああ、今までのアナザライダーは倒しても変身者の命までは奪わない。だが今回はそうではない：」

響「王我さん、王我さんが昔戦ったアナザーゴーストも似たような状況だったんですか？」

王我「ああ：色んなアナザライダーと戦ってきたけど、アナザーゴーストとの戦いが一番キツかったと思う」

響「確かに：人の命を奪いかねませんからね」

王我「正直に言うとなイーネがああの言葉を言った時、その時のこと思い出しちゃって：戦いたくなくなつた：前はたまたま変身者を生存させたまま倒すことが出来たけど、次そううまくいくかはわからないから：」

翼「王我：」

響「王我さんがそこまで思うなんて：」

王我「響、俺は君が思ってるほど強い人間じゃないよ」

響「：でも、私少し安心もしました」

王我「え：？」

響「だって、もしフィーネの警告を無視してアナザーゴーストを倒したら変身者の人死んでしまいますよね」

響「いくら平和を守る為とはいえ、他人の命を奪うなんて暴君みたいなことをしたら、私は今まで何で王我さんを信用したのか分からなくなっちゃいますから」

王我「響：」

響「私は人助けが趣味で、他人から色々言われることもありましたが、王我さんは私を理解してくれて励ましてくれました。そして王我さんも私と同じ：いや、私より大きなモノを持っていた」

響「そんな優しい心を持っている、だから私はこの人なら本当に王様になれると思っただんです。そんな王我さんが弱い訳ありません！」

翼「立花の言う通りだ。王我はその優しさがあるからこそ王としての器にふさわしいのではないのか。だからこそ仮面ライダーとなつて人々を守っているんだろ」

王我「響：翼：何か塩らしくなっちゃって悪いな：」

翼「それにまずはどうやって変身者を助けつつアナザーゴーストを倒すかを考えなければならぬな」

王我「そうだね：どうにかしないと、その人も他の人も助からなくなってしまう」
翼『しかし、一体どうすれば：アナザーライダーの状態では何の処置も行うことが出来ない』

王我「うん、そこが問題なんだ：」

夜忍「方法ならあるわ」

王我「母さん！どういうこと？」

夜忍「ちよつと賭けになるからあまり進められないけど、一番可能性が高い、且つ簡単な方法よ。どうするかはあなた達次第だけ」

響「それがあるなら：」

翼「私たちもきつといける！」

王我「そうだな！母さん、その方法教えて！」

夜忍「それは：」

EP 2 2. 5 戦士も戦いの後はゆっくりしたい

王我「やつとデイケイドライドウオッチが戻って来た」

翼「無事アナザーゴーストも倒せたことが出来た」

響「ホリチさんも無事でよかったですよ！」

クリス「全く、アナザードライダーってのは面倒で仕方ねえたらありやしない」

響「で、クリスちゃん。結局クリスちゃんの夢ってなんなの？」

クリス「言わねえよ！ふざけんなよ！」

響「ええ、何で、私、クリスちゃんのこともっと知りたい！」

クリス「教えねえよ！」

王我「ありがとな、雪音」

クリス「な、何だよ急に：」

響「でもクリスちゃんが上空のノイズを倒してくれたし、ウオッチを渡してくれたし、私達クリスちゃんにすっごく助けられたんだよ！」

翼「そうだな、あのウオッチが無ければアナザーゴーストに勝つのに苦勞しただらうしホリチさんも救えなかった」

王我「だから本当にありがとう、雪音」

クリス「れ、礼には及ばねえ……」

響「あ、クリスちゃん照れてる！」

クリス「うるせえ！」↑ナグール

響「何で〜?!？」↑殴ラレータ

翼「それにしても、デイケイドウオッチか：他のウオッチも使えるとは、強力な力だ」
クリス「ああ、アタシも形が変と思ったがこんなに強くなるとはな……」

響「でも、何でクリスちゃんがコレを持ってたの？」

クリス「その顔のやつに貰ったんだ」

王我「デイケイドに……」

翼「アイツはとでも手強い相手だった。様々なライダーに変身する……アギトや響鬼、龍騎やゴースト以外にもビルドやエグゼイドにも変身出来るのだろう。だが次こそは……」

王我「でも、俺の知ってるデイケイドはビルドやエグゼイドには変身しないし、ゴーストにも変身出来ないはず。でも奏はアイツはゴーストに変身したって言うてたし……
どうして……」

響「パワーアップしてるってことですか？」

翼「そう捉えるのが一番良いだろう」

王我「でも変だ。雪音はウオツチを受け取った時もデイケイドはライダーの力を持つたままだった。デイケイドの力が2つになるなんて…」

ウオズ「先の戦い。見事だった、我が魔王…」

クリス「うわあ!!? 何だよコイツ!!?」

翼「ウオズさん、どうしてここに…?」

ウオズ「我が魔王が力を取り戻したのだ。私が祝わないで誰が祝うと言うのだ」

王我「それにしてもウオズ、いつの間にもいたの?」

ウオズ「少し野暮用でね…」

王我「そう…まあ詳しいことはないや」

響「でもウオズさん、ここは危ないから隠れていてくれて良かったです」

王我「響、ウオズは下手したら皆より強いよ」

響「えええ!!?」

クリス「はああ!!?」

EP23. 5 わずかな時間の中でも

未来「弦十郎さん、大丈夫ですか!?？」

弦十郎「み、未来くん：あまり傷口は見ない方がいい：慣れないと気分を悪くするからな：」

緒川「私が手伝います！」

弦十郎「すまない、緒川：」

未来「響に言われてこちらに来ましたけど、まさかこんなことになるなんて：」

弦十郎「敵が来るのは予測していたがここまで劣勢になるとはな：」

緒川「すみません、私ともう少し気を張らしていれば：」

弦十郎「いや緒川のせいではない。了子を取り逃したのは俺が甘かったからだ：」

未来「弦十郎さんが甘かった：？」

弦十郎「俺は目の前の奴が敵なのは重々承知だった。だがあの時、一瞬了子くんの面影があつて身体が動かなかつた：」

未来「それって：」

緒川「未来さん、それ以上は：」

弦十郎「いや、未来くんの考えは合っているさ。俺は悪魔になれなかった。自分の決意が足りなかったからあそこで足をすくわれたんだ：」

未来「弦十郎さん：」

弦十郎「それに比べ未来くんは強いな」

未来「え、そんな私は：」

緒川「そうですね。王我くんも言っていました。誰かのために自分が身体を張ることは凄く勇気がいることだと」

未来「王我さんが：」

弦十郎「強さとはただ力があるだけではない。むしろ心が強く、それを実行出来る人間が強いんだ」

未来「そうですね：」

緒川「さあ、もうすぐ指令室です！頑張ってください！」

響「もうすぐリイディアンですね：」

翼「ああ、小日向を含め生徒達は二課が対応しているから大丈夫だとは思うが：」

王我「でも、ノイズに対抗出来るのは俺らだけだ。先を急ごう」

響「そうですね、私達の帰る場所を守らないと！」

クリス「：なあ、お前ら」

翼「？何だ？」

クリス「帰る場所があるってどんな感じ何だ：？」

翼「そうか、雪音は元々ファイネのいる場所が帰る場所だったな」

クリス「どうかな、今考えると帰るといよりは居座る場所って感じだったな」

王我「そうだな：帰る場所っていうのは誰かが居てくれていつでも温かく迎えてくれる場所ってとこかな」

クリス「温かい：場所：？」

響「そうだよ、私も未来がいる場所は凄く温かくて私の陽だまりなんだ。だから私はその場所を守りたいって思えるんだ」

王我「俺も未来から帰ってきた時に父さんや母さんが迎えてくれた時は家族の温かさを感じたよ」

翼「帰る場所に誰かがいるのはとても嬉しいことだからな」

クリス「そうか：アタシにはわかんねえな」

王我「いづれ分かるさ。：おっとリイディアンが見えてきたな」

響「未来、待ってて！」

EP24. 5 極限状態になると危ない

創世「ねえ、あの金色の鎧着けてる人、どっかで見たことあるんだけど…」

未来「え、王我さんのこと？」

詩織「お知り合いなのですか？」

未来「うん、私が事件に巻き込まれた時に知り合ってたんだ」

弓美「ああ！この人、響と一緒に居た男の人だ！」

創世「えっ、：あ、本当だ！」

詩織「こんな出会い方になるとは思いませんでした」

未来「なんか皆王我さんを知ってるみたいない草だけど…」

創世「いや、知ってるというか…」

詩織「この前ですね…」

弓美「響に彼氏が出来たんじゃなかった話になったんだけど…」

未来「響に：彼氏：？」

弓美「そうそう、それで一体誰なんだろって感じで終わっちゃったんだけど、ここで会おうとは：知ってるならなんか教えて…」

未来「王我さん！」

詩織「違いますよ！」

弓美「落ち着いて！新旧どっちも渚力〇ルは首もげちゃうから、あの人をそんなことにさせたらダメだよ！」

未来「何言ってるの！王我さん！」

弓美「だから違う！」

創世「てかビッキーはヒナとずっと一緒なんだから、彼氏なんていないでしょ！」

未来「えっ」

詩織「そ、そうですよ！いつもお二人で居るんですから恋人をお作りになる時間はありませんよ！」

弓美「てか、二人こそ付き合ってるんじゃない？」

創世「余計なことは言わなくて良い！」

詩織「！見てください！」

未来「私と響が：えへへ／／／」

弓美「え？」

未来「別にそんなんじゃないや：いや別に悪くはないけど：そんな／／／」

詩織「とりあえず落ち着いたみたいで良かったです」

創世「でも・」

創・弓・詩「(でもなんか怖い!)」

EP25.5 エクスカリバーⅡについて①

クリス「まさかジオウのギアがあんなになるとはな」

翼「ああ、私も知らなかった」

響「翼さんも知らなかったんですか？」

翼「エクスカリバーについては資料で見たことはあるが実際に起動しているのを見た訳ではない」

王我「でも、俺もこんな力が出るとは思わなかったさ」

響「一体どんな能力なんでしょうね」

夜忍「私が教えるわ」

王我「母さん！」

響「これも夜忍さんが作ったんですよね？」

夜忍「そうね。シンフォギアは了子に任せていたけどエクスカリバーⅡの作成だけは私一人でやったわ」

クリス「Ⅱってことは二代目なんだよな？」

夜忍「ええ、先代は28年前シンフォギアがない時にノイズと戦うために作られたの

よ」

翼「その技術が私達のギアに活かされているのですね」

夜忍「ええ、まあ参考にしたと言ったのはフィーネに乗っ取られる前の子だけど」

響「それにしてもどうしてセーブ状態を『エクスキヤリオン』って名前にしたんですか？」

夜忍「それは、エクスカリバーⅡには先代エクスカリバーにはない7つの力があるの。それを北斗七星型に封印したから北斗七星の『グランシャリオ』と文字を合わせて付けたのよ」

クリス「7つの力？」

夜忍「王我が『ガラハッドシールド』を使ったでしょ？あれもその一つなのよ」

翼「ではあれに相当する物があと6つもある訳ですか」

夜忍「そうね。いずれ使うことになると思うけど」

響「それじゃあ王我さんのあの過酷なトレーニングは……」

夜忍「そう、Ⅱの負荷に耐えるためよ。でもⅡの能力はまだ全てを出しきっていないわ」

クリス「あれ以上に強くなるのかよ!?？」

夜忍「ええ、私の設計段階ではもつと力を出せるのだけれど、今回は急にフィーネが

仕掛けてきたから仕方なく今の王我でも使える性能に一度落としたの」

王我「と言うことは：」

夜忍「あのトレーニングは続くわよ」

王我「はあ：」

響「が、頑張ってください：」

翼「エクスカリオンにしたのも王我への負荷を考えてなのですか？」

夜忍「ええ、あの力は扱うのにとでも苦労する。それを実戦で無闇に使われてしまつたら、周りにも被害が及ぶし、王我の肉体も耐えられない。だから時がくるまで封印したの」

王我「そうなんだね：」

響「そうだ！最後に今回出たその『ガラハッドシールド』について教えて下さい！」

夜忍「そうね、知っていると戦闘に便利なものね」

『ガラハッドシールド』

二本に分割されたエクスカリバーを擦り合わせ磁波を与える。その磁波で強力な盾を形成する技。レーザー類なら相手に攻撃を跳ね返すことも可。大きさは無限に変えられるが、広げすぎると防御力が落ちる。

EP26. 5 自分の作品ならある程度好きに出来る

響「何か最近更新頻度悪くないですか？」

未来「いつものことじゃないの？」

翼「いや、最近安定してきたかと思えばまた不安定に：余り好ましくないな」

クリス「何話してんだよ？」

響「あ、クリスちゃんはまだ分からなかったっけ。実はタチタチヒビヒビ：」

クリス「ユキユキクリクリ：なるほどなあ：確かになあ：あんまり詳しいことは知らねえが、銃弾と同じで作品も多けりや当たるみたいな感じか」

王我「でもそれと同時に面白さや丁寧さも必要になるさ」

翼「最近やつとお気に入り数の数が三桁までいったのだ。この勢いで書けばいいもの

：」

王我「作者から伝言預かってるけど、何か執筆意欲が湧かなかつたり、リアルが忙しかつたりで無理だったらしい」

翼「まあ人間誰しも気が乗らないこともあるから仕方ないと言えれば仕方ないのだが

：」

王我「今回の執筆は大分楽な方だと思っけどな、ほとんど今回はあの人考えてないし」
 クリス「大丈夫なのかよ。オリジナル要素が弱いと読まれないんじゃないやなかつたのか？」

王我「かもね。しかも更新頻度も遅い時は本当に遅いし：大丈夫なんだろうか：」

未来「忘れられることが無ければ良いんですけどね：」

???「そうですよね〜」

響「うわあ!?!?どちら様!?!?」

奏斗「あ、挨拶が送れました。俺は『Bang Dream!』DestinyST

AR』の主人公、神田奏斗です」

翼「まさかの突然のコラボ：!?!?」

王我「作者が同じだもんな」

香澄「まだそちらは話数が多い分いいですよ。こっちはそちらのまだ半分くらいしかありませんし：」

蘭「私達なんかほとんど出てないし：」

彩「お気に入りの方の数もそっちの方が多いしね：」

友希那「なんならタイトルにある『恋愛』のれの字もないもの：」

こころ「でも、あたし達はみんなが笑顔になれるならそれでいいわ!」

響「そうだよね！笑顔が一番！」

未来「うゝん：でも忘れるのは良くはないと思うけど：」

翼「うゝむ：楽しく書くか、丁寧を書くかだな：どちらも必要だがかなり難しいのか
もしれないな：」

クリス「てかお前ら、人が突然増えてることに驚け！」

奏斗「というわけで多分多忙作者が描く『RIDER TIME 戦姫絶唱シンフォ
ギア』の方の応援よろしくお願いします！感想などを書く作者がやる気出すかも
しませんよ！」

王我「あとそのボンコツ作者が描く『Bang Dream！〜Destiny』
AR〜』もお楽しみくださいね〜」

クリス「もおお、めちやくちやじゃねえか!!？」

EP27.5 ゴーホーム

月の破片処理から約二週間後

弦十郎「とういうわけで、改めての紹介だ。雪音クリスマスくん。第二号聖遺物、イチイバルの装者にして、心強い仲間だ」

クリス「ど、どうも。よろしく」

弦十郎「更に本日をもって装者4人の行動制限も解除となる」

響「師匠、それってつまり……」

弦十郎「そうだ！君達の日常に帰れるのだ！」

響「やったー！やつと未来に会える〜！」

弦十郎「クリスマスくんの住まいも手配済みだ。そこで暮らすといい」

クリス「あ、アタシに?!?!いいの?!?!」

弦十郎「もちろんだ！装者としての任務の遂行時以外の自由やプライバシーは保証する！」

クリス「はあああ。……」涙グシグシ

翼「！案ずるな、雪音！合鍵は持っている！いつだって遊びに行けるぞ！」

クリス「はあ!?？」

響「私も持つてるばかりか、なーんと未来の分まで」

王我「あ、俺のは無いから安心して」

クリス「自由とプライバシーなんてどっこにも無いじゃねえか!?？」

そしてその一週間後くらい

クリス「ったく：ここは何か変だよな：」

クリス「全員何かしらズレてやがって：ツッコむアタシが疲れてくる：」

響「あ、クリスちゃん、ヤッホー！」

クリス「お前はこんな密閉されてても呑気なことだ：」

響「師匠や王我さん達との特訓もあるからね！あとご飯が美味しい！」

クリス「安上がりなことだ：」

ブーブー！

弦十郎「！ノイズか!?？」

翼「今こそ四人、いや五人の力を合わせる時！」

王我「特訓もしたんだ。実戦でも成果を出してやる！」

響「クリスちゃんとの初めての任務だね！今日からは一緒に行こう！」

クリス「はあ!? お手手繋いで同伴出勤とか出来る訳ないだろ!?」

響「でも任務だよ!」 手ガシッ

クリス「だからって：いきなりお友達って訳には：ゴニヨゴニヨ：」

王・翼「何してんだよ(何をやってる) 二人とも。そういうことは家でやれ!

クリス「家ならいいってのか!?」

ノイズ殲滅後

未来「響!」

響「未来!」

未来「寂しかった：また響が遠くに行っちゃったと思つて：」

響「：未来：ごめん、ごめんなさい：」

未来「許さない：だから離さない：許すまで離さないんだから：」 ギュッ

響「：うん」 お返しギュッ

未来「：馬鹿：」

弦十郎「いやはやなんとも：現代っ子てのは皆こうなのか?」

緒川「流石に家に帰ってからやって欲しいですね」

クリス「だから家ならいいのか!? どうかしてるぞ特機部二!!?」

王我「こうして、二課に新戦力兼ツッコミがやってきたとさ」

奏『チャンチャン♪』

EP28. 5 重い物運ぶのは面倒+α

弦十郎「クリスくん。君への資金だ。受け取りたまえ」

クリス「マジかよ!? 小遣いまでいいのかよ?」

弦十郎「当然だ。君たちの貴重な時間を使っているのだ。割に合わなければしんどいだけだろう?」

クリス「うわっ、結構入ってんだな:」

弦十郎「危険な事も多いからな。これくらいは支払わなければ」

クリス「突起物の装者は小遣いが貰えるんだなあ。あのバカはきつと:」

響『ご飯&ご飯!』

クリス「どうせジオウも:」

王我『なんかいける気がする!』時計ピカッ

クリス「とか言って腕時計めっちゃ買いきやうだし、こつちもこつちで:」

翼『常在戦場』バイクズラッ

クリス「乗り捨て用のバイクを何台も買ってそうないメージあるな:いや勝手な想像だけ」

クリス「という訳で買物につき合ってください！」

弦十郎「だからって何故俺が？」

クリス「装者二人だとダメだし、ジオウは念のため外しておいたんだよ」

弦十郎「（しかし・一体何を探しているのだ？）」

クリス「と・いう感じでおっさんと仏具店に行ってきたのさ」

王我（ウイザード）「へえ・って仏具店？？」

クリス「ああ。んでお前の魔法でウチまで運んでくんないか？」

王我（ウイザード）「まあ別にいいけどさ・」

『コネクト プリーズ』

クリス「よっし、これで完了だ。助かったぜ、ジオウ」

王我（ウイザード）「別に構わないけど・これって・」

クリス「ほらアタシばかり帰る家が出来ちや、パパとママに申し訳ねえだろ」

王我（ウイザード）「・そうか・」

王我（ウイザード）「（なんだよ・やつぱり優しい奴なんじゃないか：）」

クリス「いや〜なんかおっさんが変な青い男どもに7回くらい話しかけられてるのが気になったが、いい買い物出来て良かったなあ」

王我（ウイザード）「いやそれ職質？？」

クリス「そういえばおっさんがドーナツ買ってきてくれたぞ」

『コネクト プリーズ』

王我（ウイザード）「ふあひか、ふあんふゆ（マジか、サンキュー）」ドーナツモグモグ

クリス「もう食ってんのかよ!? ジオウ、お前魔法で取っただろ!?」

王我（ウイザード）「別にいいだろ? 俺の分しか取ってねえんだから?」

クリス「違えよ! まだ荷物運搬終わってねえんだよ! 終わってから食えって言おうとしたんだよ! ったく早く終わらせてえからさっさと手伝え!」

王我（ウイザード）「うそーん。性格は優しくても人使いが荒いなあ…」

・今回のエクスカリバーIIの技紹介

『フェイルノート』

左手に光の弓を出現させ、そこからエクスカリバーを放つ技。また威力を抑えたり、目標を絞ったりする場合はエクスカリバーが弓となり光の矢を放つ。

EP29. 5 卵の茹で時間は感覚だと難しい

響「そういえば王我さん」

王我（ダブル，左）「どうした？」

響「ダブルウオッチって結構複雑そうですね、実際どうなんですか？」

翼「ふむ、それは私も気になっていた。性格も二通りあるようだし：」

未来「なんか変身を解除したら性格が変わるんですね」

王我（ダブル，左）「うくん・そうだな。でも俺も少し説明しづらいつて言うか：」

クリス「まさかほとんど分かんねえとか言うのか？」

王我（ダブル，左）「ば、馬鹿言うな！俺が分かんない訳：」

ウオズ「では、私が教えよう」

クリス「げっ！出やがった！」

ウオズ「ダブルの能力による我が魔王の性格変化は大体こうなっている」

ダブルウオッチ起動↓左，右確率は同じ。

ダブル変身解除（フアングジョーカーを除く）↓左80%，右20%

ダブル変身解除（フアングジョーカー）↓右100%

王我（ダブル，左）「ま、そういうことだ」

未来「（誤魔化したんだろうなあ〜）」

王我「ノイズとや黒幕との戦いも激化するだろう。だからこそ必要になるのは、如何なる事態にも心揺れない男の中の男の生き方さ。そう、俺みたいにな：」

響「おおッ！なんかカッコいい！」

未来「そうかな：」

王我（ダブル，左）「わかるか響。これがハードボイルドだ」

クリス「面倒くせえな、この性格のジオウ：」

翼「まあ立花には受けてるみたいだし、良いではないか」

ウオズ「まあとりあえず一見適当に見えるが、基本的にはどの性格になるかは決まっています、しっかりと予測がたてられると言うことだ」

翼「なるほど：為になりましたウオズさん」

クリス「正直どうでもいいけどな」

ウオズ「だからこうすると：」

『フアングー！ジョーカー！』

ウオズ「こうなる」変身カイジヨサセール

王我（ダブル，右）「ゾクゾクするねえ」

響「おおっ！」

未来「本当に変化したよ！」

ウオズ「さらにこうすると……」

『サイクロン！ジョーカー！』

ウオズ「最初と同じ性格に……変身カイジョサセール

王我（ダブル，右）「……」

響「あれ……？」

クリス「違いじゃねえか！」

ウオズ「に、20%の確率だ……有り得くない……」

翼「つまり、ダブルで狙って性格を当てようとするのは困難と言うことだな」

ウオズ「そう、翼さんの言う通りだ！」

クリス「（誤魔化したな）」

響「……あれ？王我さんがいませんか？」

王我「タピオカラーメン……同じくらいのカロリーと言われているタピオカとラーメン

を同士に食べるとは……」

クリス「だああああッ！こつちもこつちで面倒くせえッ！」

EP30.5 完璧などない

響「それにしても、カブトライドウオッチを使った王我さん：」

王我（カブト）「おばあちゃんは言っていた。：」

翼「私的には意外と悪くはないと思うが：」

クリス「ええ：めんどいだろ：」

未来「まあ良い事言ってるのは間違いないですからね」

翼「しかも先の包丁捌きも見事だった」

クリス「そういえばなんかコイツが蹴ったサッカーボールがあり得ない軌道を描いてたぞ」

響「あの王我さん、完璧なんじゃないかな？」

未来「ちよつと冷たいけど、なんでも出来る」

翼「まさに防人：」

未来「かどうかは分かりませんが：」

翼「なんと!?？小日向にまで言われるようになるとは：」

クリス「おい、なんか妹と飯食ってるけど」

和花「うん！今日のお兄ちゃんの料理もグツ！」

王我（カブト）「ああ、最近疲れてるだろ？すっかり食べなきやな。お前らも早く来い」
未来「ありがとうございます」

翼「冷めないうちに頂こう」

響「わーい！ご飯！」

クリス「元気だなあ」

prrrr

和花「あ、電話：はい、もしもし：あ、久しぶり！うんうん：」

響「あ、電話し始めましたね」

和花「うん、そうなんだ！」

王我（カブト）「コラコラ、食事しながら電話するもんじゃない」

和花「あ、ゴメン、また後でかけ直すね」電話キール

和花「ごめんね。だって：好きな人と付き合えるんだもん：」

翼「なんと!?!？」

未来「え、そうなの?!？」

クリス「なんか面倒な話になってきたなあ」

響「へえ、聞いてみたい！ね、王我さ：」

小皿オトース

王我（カブト）「ナアニイ：!?？」チーン

響「あれ：？」

王我（カブト）「遂にこの時が来てしまったか：」

翼「お、王我：？」

王我（カブト）「何処の誰だ？どんな奴だ!?？ええい面倒だ！今すぐここに連れて来い！姉さん達も交えて会議だ！」

未来「ち、ちよつと王我さん、落ち着いて！」

和花「違うって！僕じゃないよ。友達の話」

王（カ）・響・翼・ク・未「「え？」「」」

和花「その子少し前に、好きな人に告白出来ずにいてさ。僕がメールでちよつとしたアドバイスをしたことがあるんだよ。それが成功したって報告をされただけだよ！」

王我（カブト）「なんだそういうことか：」

和花「もう、お兄ちゃんの早とちり」

王我（カブト）「そ、それを早く言え：」

響「なんか：カブトの時の王我さんって：」

未来「凄いシスコンだね：」

翼「お、この肉、脂身が少ないのにしっかりとした肉汁が溢れている！」
クリス「(もうツツコむのもめんどくせえ・飯ウマ)」

EP31. 5 逢坂家ってなんなん？

響「あの～すみません。前から気になってたんですけど、逢坂家について教えてください！」

未来「あ、それは私もちょっと気になってたんです。王我さんのお父さん有名ですし」
王我「あくそういえばあんま詳しくは説明してなかったよね。」

翼「せっかくの機会だ。存分に紹介した方が良く」
クリス「アタシは興味ねえから帰るわ」

響「え～一緒に聞こうよ、クリスちゃん！」腕ガシツ

クリス「やめろ！離せ！」

未・響「お願い！クリス（ちゃん）！」

クリス「あく！つたくしやねえな！ジオウ、短くしろよな！」

王我「あいよ。じゃあ明治時代くらいから話すか」

クリス「長くねえか？！」

王我「簡単にだからそんな長くないよ」

翼「私も助太刀するからな」

王我「逢坂家は明治時代には政府の第一人者としては活動していたんだ」

響「当時から凄かったんですね」

翼「しかし第一次世界大戦時、海外と手を結ぼうと考えを持っていた逢坂家は当時の日本社会とは正反対だったのだ」

王我「そう。だから政府陣から煙たがられ、挙げ句の果てにはありもしない罪をなすりつけられてしまったんだ。その結果全てとまではいかなかったけど多くの権力を失ったんだ」

響「はわわッ、なんか大変なことになっちゃったんですね!」

王我「でも、そんな暗い時期もすぐに終わる」

翼「王我的曾祖父が第二次世界大戦で結果を残し、更にその後海外との貿易を頻繁に行なつて逢坂家の権力の回復の兆しが見えてきたのだ」

未来「戦争はアレですけど、なんとか元通りになりそうで良かった」

翼「そして更に力を取り戻したのが、一也叔父様：逢坂司令長官だ」

王我「うん。じいちゃん達の頃にはほとんど戻った権力が父さんが成果を上げて更に地位を伸ばしたって感じかな」

未来「そういえば王我さんのお爺さんは今何をしてるんですか?」

響「確かに：司令長官が政治に関わってるならまだ現役で政治活動をしてるんですか

「？」

王我「いや、じいちゃんは隠居して、バイクいじってるよ」

クリス「思ったよりもジャンキーな老後送ってんなあ」

翼「ちなみに私のバイクも王我の元のバイクも王我のお爺様がメンテナンスをしてくれていたんだ」

王我「翼はよくバイク壊すからなあ。じいちゃんも困ってたよ」

翼「し、仕方ないではないか。任務なのだから：当然物は壊れる：」

クリス「いやバイクはそんな頻繁に壊れねえだろ」

翼「くっ：雪音にまで言われる始末：！」

響「でも逢坂家について知れて良かったです！」

王我「うん、また詳しく知りたかったら話すよ」

EP32. 5 続くことには理由と意志がある

響「そういえばキバの力を使った王我さんってどうなるんでしょうか？」

王我（キバ）「う〜ん…一人称が『僕』になることかなあ」

クリス「そんなことねえだろ。ぜってえ尖ったのがある」

キバット『なら俺様が教えてやるぜ〜！』

響「キバットさん！」

クリス「てかなんなんだよ、このコウモリ擬きは…」

キバット『擬きとは何だ！俺様はキバットバットⅢ世だ！』

翼「まあ雪音、ベルトさんなどを見てきた今こんなことで驚くことはないんじゃないか？」

クリス「なんだよベルトさんって…？」

響「ドライブに変身するときのベルトのことだよ」

クリス「ああ、あれか…」

キバット『王我はな、ヴァイオリンが弾けるんだぜ〜』

翼「一也叔父様がかなりの腕でな、幼少期から練習を行っていたんだ」

響「うわあ〜！楽しみ〜！」

王我（キバ）「それじゃあ弾くね」

♪♪

翼「お見事！」

響「うわあ！凄いい！私楽器ほとんど弾けないから凄いなって思います！」

翼「正直にいうと普段より上手い」

王我（キバ）「本当のことだけど、ちよつと傷つくね…」

キバツト『でもそれだけじゃないんだぜ』

クリス「まだなんかあんのかよ…」

キバツト『あと王我はヴァイオリンが作れるんぜえ！』

クリス「あれ作んのムズイだろ？」

響「凄いい！」

クリス「お前それしか言わねえな…」

翼「昔から王我の音楽の腕は中々だと思っていたがライドウオツチでそれが引き上げられるとはな…」

クリス「コイツそんな前から音楽に触れてたのか？」

翼「王我は幼少期からピアノも習っていたな」

響「幼少期からピアノですか：なんかお金持ちとかの子が習ってそうなイメージがあります。やっぱり家柄が良いと音楽も自然に習うんでしょうか？」

王我（キバ）「どうなんだろう：少なくとも僕はやりたかつたから自主的に続けたんだ。和花も姉さんもピアノをやってたんだけど、姉さんは特に必要ないって理由で辞めちゃったし」

クリス「辞めたりとかはしねえんだな」

王我（キバ）「まあきつかけは家柄だとしても僕がやりたいから続ける。続ける理由はそれだけかな」

クリス「なんか今回はまともそうだな」

翼「確かに、ウォッチの力で変化した王我は少し癖があるからな」

クリス「（元も大概だと思っぞ）」

王我（キバ）「あ、この木ヴァイオリンに使ったら良さそう：」ノコギリスチャ：

クリス「おい、ジオウ！なんでテーブルなんて切ろうとしてんだよ！！？」

響「はわわ！止めなきゃ！」

翼「：やはり、王我は癖があつてこそだな：」

EP33. 5 火加減は体で覚えろ

響「王我さん！質問があります！」

王我（響鬼）「お、なんだあ？」

クリス「なんかオツサンくせえなあ」

響「響鬼ってなんか他の仮面ライダーに比べてなんか特別な感じがするんですけど……」

翼「いつもと変身方法が異なっていたな」

クリス「そういや、ベルトじゃなかったな」

王我（響鬼）「俺は音叉で変身したが、奏は音笛で変身したら鬼によって違うんだよな」

王我（響鬼）「ちなみに魔化魍を倒すには音撃の力が必要でその音撃道を極めて更に肉体を高めることで鬼となるんだ」

響「じゃあ、私も変身出来るかもしれないんですか!?!?」

王我（響鬼）「可能性としてはあるな。シンフォギア装者はそれなりに過酷な鍛錬をしているから音撃道さえ学べばもしかしたら……」

響「わああ……！あ、でも変身の時って服って燃えないんですか？」

クリス「すつげえ燃えてたもんな、ジオウ」

王我（響鬼）「あれなあ。あれ気を抜くと服燃えちまうんだよなあ」

クリス「マジかよ：そんなんやべエだろ：」

響「女の子としてはちよつとそれは嫌だなあ…」

翼「では、あそこで変身を解かなかつたのも…」

王我（響鬼）「いや、俺は訓練して上手いこと服が燃えないように調整出来るようになったんだ」

クリス「どうにかなんのかよ」

王我（響鬼）「正直言うとお音撃を鍛えるときよりもキツイかもしれないなあ」

翼「肉体を鍛えるのと精神を鍛えるのは似ているようで違うからな」

王我（響鬼）「音撃は鍛えることで能力が上がるが、これに関しては力の加減が難しいからな」

響「服が燃えるのは嫌だけど、少し気になるなあ…」

王我（響鬼）「ただ鬼なることは魔物に近づくことになる。相当の鍛錬をしないと道を踏み外してしまう」

響「：私の実力ではまだまだ足りないかもしれないかもしれませんが。でも師匠や翼さん達からたくさんのお話を学んで、実際なるかどうかは別として鬼になれるくらい強くなってみせま

す！」

王我（響鬼）「頑張れよ」

翼「：今日の王我はいつもより大人っぽいな」

クリス「：かもしれねえな」

王我（響鬼）「：でさ、早くメール返さなきゃいけないんだけど、どうすりゃいいのこれ？」

クリス「ぜんぜんダメじゃねえか！」

・今回のエクスカリバーIIの技紹介

『アロンダイト』

黒い霧を纏ったエクスカリバーを振るう技。その黒い霧で相手の視界を奪う能力がある。また水辺で使用すると水を操ることも可能。

『ガラディーン』

エクスカリバーIIを分割した状態でそのうちの一本を太陽に掲げ、光により刀身が光りそれを振り下ろす技。昼間だと刀身が3倍になる。直接日光が当たる場所でないで使用できない。